

【福島大学むらの大学アーカイブ 25】【南相馬 Chapter 10】

「都市に依存しない若者を」

～Uターンして地方の魅力を生み出す～

相双フィルムコミッション代表理事 根本李安奈さん



インタビュー日：9月27日、11月13日

インタビュー場所：双葉屋旅館、オンライン

聞き手：阿部寛希、金澤怜美、佐久間天音、松崎里帆子、前川直哉

プロフィール

1996年1月6日生まれ（インタビュー時28歳）。小高区出身。福浦小、小高中、相馬高校を卒業後、日本大学芸術学部映画学科に進学。大学卒業後、広告代理店で働いた後、2021年2月に小高に戻り、小高ワーカーズベースで仕事を開始。2023年8月からは個人事業主として様々なイベントを企画・開催。2024年2月に相双フィルムコミッションとして法人化し、現在は代表理事を務める。

1. 震災前の暮らし

－お生まれは小高ですか？

根本：はい。(2011年の3月の)震災の時から4月ぐらいまで会津若松に一回行って、その後、相馬市に4月以降来て、2014年まで3年間かな。そこから東京に2021年まで、2021年からは小高です。

－育ったのは小高の昨日私たちが伺ったあちら(前日に根本さんの祖父母に取材しておりその際に伺った自宅)ですか？

根本：そうです。

－耳谷(小高区耳谷地区)のあそこですか？

根本：そうです。15歳までずっとあそこです。

－子ども時代の李安奈さんはおじいさま、おばあさまと、あと、お父さま、お母さま。李安奈さんと、あと、ごきょうだいが。

根本：お姉ちゃんと妹がいて(私は)3姉妹の真ん中で、姉が2個上、妹が5個下です。

－現在の家族構成も伺ってもいいですか。

根本：夫と娘1人とシェアハウスに住んでいて、家族ではないですけど新卒1年目の男の子も一緒に住んでいます。

－お嬢さんはいくつですか。

根本：今、1歳3カ月です。

－今のお仕事を教えてください。

根本：1つは相双フィルムコミッションの代表理事をしています。あとは個人事業、フリーランスみたいなことかな。

－現在は、小高ワーカーズベースには所属はしていないんですね。

根本：所属はしてないです。一部業務委託受けたりとかはしているかたちです。

－どういう小中学校時代でしたか？

根本：自然豊かなところなので、走り回ったり自転車で坂を下りたりみたいな感じでした。同級生も自転車で行ける距離に4~5人住んでいたの、そういう近所の子たちと遊んだりもありました。習い事も、水泳やったり、ミニバスにも1年入ったり。あと野球をやったりもしました。

－野球もやってらしたんですか。

根本：はい。あと一応、ピアノも通ってたのかな。小学校の自然教室みたいな、夏と冬とかにあるような合宿型のものに毎回応募して行くみたいな、そういうのとか、運動するのが好きでした。勉強も嫌いではなくて、小学校ぐらいまではだいぶ楽しく、宿題はやらなかったですけど学校の授業で楽しく聞いて追いつけるぐらいの感じではありました。

－田んぼの中とか自然の中でみんなと遊んでたっていう感じですか

根本：そうですね。ザリガニ捕ったり。そんなきれいな川じゃなかったですけど道草的なことはして、すぐは帰ってこなかったです。同世代の子たちも複数人いたのでだべりながら、帰りながら寄り道してみたいな。でも、やっぱりあそこ（ご実家のある耳谷地区）が小高（のまちなか）よりも、より自然なところなので小高の子たちはもう少し浮舟文化会館でたむろしてたりみたいなのがありましたけど、あそこだと何もないから、チャリ止めてちょっと川遊びするみたいなき感じですよ。

－虫捕ったりとかもしましたか。

根本：虫はいたら捕まえはしたりとか。でも、ザリガニ捕ったかな。

－その当時（小中学校時代）、人はどれぐらいでしたか。

根本：中学校の同級生は、150人。小高中の1学年が150人いて、4つの小学校から1つの中学校になってるので。一番大きい小高小学校が80人ぐらいかな。あと、福浦小、金房小っていう中ぐらいの小学校が30人、20人ぐらいいて、あと、鳩原っていう山あいのほうのところは5人ぐらいなのが合わさってみたいなき、そんなイメージですよ。

－福浦小の時にはもう1クラス？

根本：そうですね。ちょうど35人だったので、2つになったり1つになったり、いろいろだったんですけど。

－おじいさま（根本洗一さん）は有機農業で有名な方ですが、李安奈さんも子どもの頃、田んぼや畑を手伝ったりなさってましたか。

根本：そうですね。種まきの時は、苗箱に土を入れる作業をずっと付きっきりでやったり。あとは、その苗箱を機械のレーンに入れるみたいな、ベルトコンベアに載せていく、子どもでもできる仕事を種まきの時にやっていました。田植えの時は、その苗箱の稲が育つので、余ったドロドロの箱を洗うのを、川遊びと一緒にしたり。キュウリができてたら「おやつだ」みたいな感じで食べたりもししていました。

－なるほど

根本：祖父母が有機農業で精を出してた時は有機農業を守る会みたいな、何かよく分からないけどいろいろなお客さんが居間に来て夜な夜な、玄関から上がった部屋は、言ったらおじいちゃんの会議室のようになるので、そこにいろいろなおじいさんたちが来ていましたね。その時はそれがよくある風景だったので何も思わなかったんですけど、よくいろいろな人が来てたんだなっていう。いろいろ長く

話してみたいな感じです。

—いろいろな大人が出入りするおうちだった。

根本：そうですね。父もバンドをやっていたり、いろいろ人呼んでホームパーティーみたいなことをよくやってたので、家にはいろいろな人がよく出入りしてました。

—お父さまはバンドもやっておられた？

根本：そうですね。音楽好きで。

—お父さまのお仕事は？

根本：南相馬市の市役所の職員。当時（幼少期）は小高区役所だったかもしれないですけど、合併しているいろ。

—お母さまもお仕事を。

根本：母親は、その時はまだ大熊町の小学校2つと中学校1つのALTでした。町に雇われて英語教育の補助をするみたいなどころだったりとか。あとは英語の教科書の仕事も、出版社から受けて一部やってたのかな。震災前は、そんなことをしてました。

—お母さまのご出身は？

根本：イギリスで。ALTとして日本に来て。ALTって大体2~3年ぐらいで帰るんですけど、それが長くいることになったみたいです。

—小さい頃から割とにぎやかなおうちだったんですね。

根本：そうですね。そんなワイワイみたいな感じでもないんですけど、社交的、人の交流はあるみたいな感じです。

—（地域の人たちは）お互い大体知ってる感じですか。

根本：そうですね。もうお互いの親からきょうだいから家から、何でも知ってるみたいな感じですね。悪いことできない。

—いろいろな職業の方が身近にいらしたと思うんですけど、子どもの頃の将来の夢って、何かありましたか。

根本：ちっちゃい頃、小学校ぐらいはやっぱり何か作ったりするのが好きだったから、パン屋さんかな、みたいなそんな感じで。中学校はちょうど脳科学のドラマ（MR.BRAIN）をキムタクがやって流っていて、それを見て「脳科学面白い」と。ちょっと脳科学ブームみたいなところもあって、その人の性格が脳の構造で変わってくるみたいなのがすごい面白くて、脳科学を学びたいと思っていたりとかしました。

2. 東日本大震災の経験

—中学校時代の部活は何ですか。

根本：卓球部に。運動部に入りたかったんだけど、女バスも女バレもテニスもみんな女子が結構強い方々が多くて、ちょっとなじめないかもって。中学校も小高小学校の子たちが結構強くて荒れてたりとかして、それと一緒にいるのも…。中学校もなかなか、いろいろな世界の人たちがいるなど思いながら過ごしていました。

—では午前中は、小高中で卒業式でしたかね。

根本：そうです。

—午後2時46分に地震が来た時は、どちらにいらっしゃいましたか？

根本：自宅に戻っていて、父と母と姉もいたのかな、多分。祖父母もいたのかな。妹だけが小学校にいて。すぐ思ったのは、当時も首都直下型地震が起きると聞いてたので、「東京で大きい地震来たのかな」とか思ってたらかこちだったという感じで。その時は強い地震だなとは思いましたが別にそれだけで。「おー、大変だ」というぐらいの。むしろ妹が…当時いくつなんだろう。15の5個下かな。

—小3か小4ですよ

根本：そうですね。なので、妹に理科の教科書見せて、これが初期微動でこれが主要動で、みたいな地震のメカニズムを伝えて。物理的、こういう現象なんだよみたいな、こういうことが起きるよみたいなのを説明して、別にそんなに慌ててたわけじゃないですけど、安心させようと思ったりとか。

—なるほど。3月11日は自宅で過ごされましたか？

根本：そうですね。水は止まって電気は来てて、水も井戸水は電気でもみ上げられたので、生活水としては一応使えて。あと、ガスもプロパンガスなので特に止まりはせず。そんな感じでした。電波は最初の日には結構つながってはいたんですけど、2日目ぐらいからすごいつながらなかったです。なので、一応家では生活できるような、最低限インフラあったりとかして初日は家で泊まったんですけど、家以外の市内のエリアが割と電気来なかったりもしたので、炊き出しみたいな感じで、駅の近くの広場に住民の方集まっていたのにおにぎりたくさん作って持ってくるみたいなことはしました。

—李安奈さんもおにぎりを一緒に作った？

根本：そうですね、作って。持ってたのは親か誰かだったような気がするんですけど。

—例えば、原発が危ないとかそういう話っていうのは何か出てたりしましたか。

根本：思い出せないな。避難の指示が出てたのが、双葉郡はその日の夜からですもんね。だから、ニュースではやってたんです、多分。何かやばい、大変そうだねっていうのは思いながら、別に、でも、そんな何が大変かとはあんまり思ってなくて。

というのも、良くも悪くもこういう原発から近くの地域に住んでいると、原子力教育みたいなことを東電主催でやってくれたりとかして。例えば、放射線や放射能がこういうものだという説明、霧箱っていったって光が透けるのを見れたりとかする科学教室みたいなのがあったりとか。あとはいろいろなプログラムがあって見てたから、原発の中にも入ったこと何回もありましたし。ああやって「安全だよ」っていろいろ教えられてたから、そんなに大変じゃないんだろってというのは思っていたんですけど、なじみがあったが故に…みたいな。

—原子力教育などは、小学校や中学校の時に割とあったんですね

根本：そうですね。学校でも一応はあったとあっていて、むしろ東電主催でいろいろ、じゃあ、ディズニーに行けますみたいなのが追加であってとか、ハワイアンズに泊まれますみたいな、プラス原子力教育みたいなのがあって、そんなのもうディズニーランド行けるんだ、行こうみたいな感じで、そういう感じでよく行ったっていう。

—原発の中も入ったことがありましたか

根本：あります。そういう科学教室みたいな感じで何回か入ったりとか、富岡の今廃炉史料館になってるところも元々、何か分からないですけど。センターみたいなところだったのでそういうところも何回か、どういう経緯で連れて行かれたか分からないですけど行ったりとかしたことはありました。

—当時の夜はいかがでしたか？

根本：その日の夜は別に、一応避難してるのかなぐらいの話で思っていて、2日目の午前中に、だいぶ自分の家に近いところなので浪江町まで避難の指示が出たって、じゃあ、午前中に一回避難したほうがいいかみたいなので、馬事公苑っていう原町（小高区の隣に位置する区）の山あいのほうにあるところで、何となく荷物積み込んでみんなでそこに行っただけです。そこに人も集まっていたんですけど、でもそこにも何もすることないねって言って。でも、ご飯も食べないといけないのもう一回家に戻ってきて。一応、荷物とかは車に積んだままにしていました。

—なるほど。

根本：で、何時だろうな。日が沈んでたから、南相馬も小高も避難してくださいって言われたのが、その2日目の夜7時とか8時とかで。田舎なんで聞こえない防災無線で、石神中が避難所になってますって言ってたと思うみたいな感じで、そのまますぐ荷物載って石神の小学校なのか中学校なのか忘れましたが、原町のほうの中学校のところに避難をしたというふうな状態でした。

避難所行って、その日の夜1泊と次の日もう一泊、3泊ぐらいしたのかな、2泊かな。その後、その間に父親とかが公務員なので基本的に避難所にはおらず、災害対応をいろいろして夜だけ一瞬帰ってきたりとか。ニュースとかも当時は見れてなかったのが、何が起こってるかとかはあんまり分からず、でも、公務員の父がいっぱい亡くなった人運んだみたいな話とか、あとは一応、メールがたまにだけ使えたりしたので友達と連絡取りながらみたいな感じだったりとか。あとは中学校、避難先にも同じ小学校、中学校の友達がいたりとかしたので、その子たちとちょっと時間つぶしてみたいな

様子でした。

—情報がよく分からない状況だったと思いますが、どうでしたか。

根本：基本的に避難してた時も、何か大変そうだけど、そんなに別に落ち込むあれもなく。多少の不安はありましたけど、割と「何とかなるんだろうな」みたいな。3月12日の避難の夜とかにもう物資でおにぎりが届いて、おにぎりに「頑張れ」みたいな（言葉が）ラップに書いてあったりとかして、「日本のシステムってすごいな」って思ったりとか。誰がどういうふうに送ってくれたかは分かんないですけど、すぐ自衛隊が来たりとかっていうのがあって、そういう支援の仕組みがあったのがやっぱりすごいなって。

あとは、馬事公苑に2日目の朝避難していく時に、防護服を着た人が桃内から小高に来る途中のところに立っていて、多分数値を測ってたんでしょうね。でも、それを私たちは知らされていない、ここが安全なのか危ないのかっていうところを知らされていない中、今ここに防護服の人が立ってますみたいな違和感が。「あれ何だ？」って話になって、何か自分たちが知らされていないというか、一般市民として教えられてないこともあるんだろうなと、不信感のような気持ちと。

—なるほど。

根本：だから、政府が「直ちに影響ありません」みたいなこと（を発表していたの）は当時、中学生ながらに「直ちにじゃなくて、長期的には影響があるんだろうな」とか、そういうことを思って不信感とかはあったりしたのと。その時は生活に対しては、割と大変だけど何とかすればいいかな、っていう楽観的な様子ではあったんですけど。

—同じご家族の中でも、地元の職員であるお父様とイギリスご出身のお母さまとで立場の違いがあったのではないのでしょうか

根本：そうですね。当時、母親つながりで海外の方のつながりがあって、会津に避難してから話聞くと、震災起きてすぐその方は飛行機乗って自国に帰られたっていうふうな話で。でも、母親がそれを聞いた時は、私はそうは全然頭に思い付かなかったっていうぐらい、割とこっちの生活になじんでいた人だったので。周りから言われたことも多分あったとは思んですけど、むしろ Facebook とかで発信して支援もらったりみたいな。例えば、相馬に行った時に、子どもたちにボールペンとかノートとかみたいなのを自分の住所宛に送ってもらったりみたいなこともしてたので。本当のところは分からないですけど。

—なるほど。高校への進学はどのような状況でしたか？

根本：原町高校に志望していました。受験をしてテストを受けて、卒業式後に結果が出るっていう状態で。合否は分からない状態で、結局、全員合格にしますというふうな話が来て自分の点数とかもよく分からず、本当は落ちてたかもしれないけど、原町高校に行けるよって言われて、けれども、学校としてはキャンパスというか、場所としては再開はしないと。サテライトって言って福島市とか相馬高校と、あとどこかな、もう一個ぐらいに分かれて学校生活やりますと。授業はできるけど、部活動は間借りだからできないですよっていう話があって。私は割と部活とかが好きだったので、じゃあ、

相馬高校に転入しようかっていうところで一応、私が転入した時はもう相馬高校としては学校がスタートしてて。

—なるほど。

根本：なので、転校生ですって紹介されて入ってくるみたいな感じだったんですけど、それこそ転入試験も一応、試験をさせられて。当時、試験あるから学校行ったら、私は一応ペンとかは持ってったけど、ペンない子もいたりとか、制服もない子も、大熊から避難してる子とかはなかったりとか。あと、今もどうか分からないですけど、テストの時って学校の時計って下げたりとかして、自分の時計でやるみたいなルールがあるじゃないですか。「時計なくしますね」って言った時に、「すみません、みんな時計ないです」とか。先生も「あー、そうか、じゃあ、出しとこう」とかそういうすごい特殊、先生たちもいつもどおりの頭でやるけど、もっといろいろな特殊な状況があって。

制服もみんな相馬高校の子たちは自分の制服着てる、着てなかったんだな。届かなくて中学校の制服を着てた子も何人かいてって中で、何となく知り合いからもったりとかして制服を着てる、着てないとかも高校1年生とかにとってはみんなと一緒にみたいなのは、浮くみたいなのはちょっと気にしたりとかするところなんで、そういう中でカオスな1年生が始まりました。

—会津にいったん避難されて相馬へ戻ってきたのは何月ぐらいでしたか？

根本：4月の、多分、第1週、第2週とかちょいちょい。

—会津若松には？

根本：1カ月だけです。多分、丸1カ月。でも、若松の時に4月11日迎えたんで、4月中旬ぐらいだったのかな。なので、妹は3月終わりまで小学生はあるので、一応、若松の門田(もんでん)小学校みたいなところに、それこそ1カ月ないぐらいちょっとだけ通ってみたいなことをして私たちは日中暇で。

—相馬高校の中にサテライトで原町高校がありましたね。同じ学校の中に多くの学校が混ざっていたのでは？

根本：はい。学校の結構カラーが違う中で、相馬農業は割とやんちゃな子たちが多いみたいな。でも廊下ですれ違うみたいな、制服違うのにみたいな不思議な感じです。

—1年生のほぼ始まりの時期、何週間か遅れたぐらいのタイミングで相馬高校に入ったことになりま
すね。

根本：そうです。

—小高中学校からだ相馬高校へ進学する方は少なかったのでは？

根本：私だけでした、当時は。元々相高を受けてた子は数人いたんですけど、でも、結局行ったのは私だけで。原高には友達がいる。原高の子で、相馬高校に間借りして入ってきてる友達は何人かいたんですけど、でも、やっぱりカリキュラムが違うと廊下ですれ違って、よっ友というか「おー」って

挨拶するだけになって、どんどん気まずくなってくみたいな感じでした。

—そうですね。

根本：なので、最初の友達0から高校スタートっていうのは結構しんどかったです。かつ、相馬地区の子は小中学校のコミュニティがしっかりしてるので、より、もう既にグループが結構しっかりある中に入っていきことの大変さみたいなのはあり。なので、1年生のクラスとかはかなり、すごく初めてぐらい難しいなみたいなことがあって。部活だけは楽しめればと思って、和太鼓部に入って、そこはすごく楽しくできて友達もできてっていう感じだったんですけど、1年生の時はかなり、クラスになかなかなじめなくて苦労したっていう。2~3年生は理系のクラスになったので、理系のサバサバした女子たちとは割と仲良くできて、だいぶ居場所が少しはできたなっていう感じでした。

—なるほど。相馬にいらしてからは、おじいさまとおばあさまも一緒でしたか。

根本：そうですね。祖父母もああやって農業が生きがいの人たちなんで。当時、作ることもいろいろ難しい状況だったので、でも、相馬で近くで農地借りてみたいなことをしたりとか、「花育てるか」とか、「でも花食べねーしな」みたいな話をして。だから、祖父母もいつもの生活ができないっていう中で移住者を経験して大変だっただろうし。

—そうなんです。高校の話に戻りますが、和太鼓部に入って少しずつ居場所ができた。

根本：そうですね。だいぶ救われたところがあります。あとは、太鼓部の先生で川俣の太鼓のチームで今でもやられてる先生がいて。その先生も川俣の山あいのほうで避難の指示があった場所だったのでそれを聞いて、当時同じように学校の中で避難をしてる子っていうのがチラホラはいたんですけど、でもそういう話をするわけでもなく。その先生にチラッと避難で大変ですよ、みたいな話はしたりみたいな。自分が置かれてる状況を言語化する機会とかも多分なかったので、そういうところに助けを求めたみたいなところもあると思います。

—なるほど…。当時の相馬高校は津波の被害が大きかった人からそうでない人まで、様々いらっしやったのでは？

根本：そうなんです。割合的にはやっぱり、言い方は難しいですけど、震災に対して地震があったってことしか経験をしてない子たちのほうが多くて。一部、家族なり友達なり亡くなってみたいな子たちがいた時に、その子たちと自分の状況の話もできるわけでもないし、でも、家族亡くなって1人になった子に掛けてあげられる言葉もないし、それは友達づてに聞いているけどその子には話せなかったりとか、あとはその子の前では親の話をしなかったりとか。高校生なりにすごいカオスな状況で、みんなそれをしゃべらないっていうことで、何かを保とうとしていたんだろうなと思うんです。

—普段も、震災や原発事故の話はほとんど出ない？

根本：そうですね。自分がいろいろ思うところがあっても友達と話すっていうのはなく、それこそ、おじいちゃん、おばあちゃんがニュースに対してぼやいてるとかっていうのはあって聞くけど、でも子どもにとっては、そんなに大人が不安がってる声はあまり嬉しくなかったりとか。あとは、福浦小

学校でも津波で同級生が2人ぐらい亡くなって、それに対してもみんな、同級生もバラバラにるので話す機会がないみたいな感じでした。

—震災を経験してから、将来の夢が映像作成をして地域の話をするように変わったと記事で読みましたが、当時何かを感じていたのでしょうか？

根本：そうですね。ニュースで「10年後とかにしか避難解除されないかも」みたいなものを見て、高校1年生の10年後ってもう途方もない未来の話なので。じゃあ、10年後に何ができるかなみたいな。それまでに自分ができるところを増やしておきたいみたいな気持ちがあつて。

—なるほど。

根本：小学校ぐらいから WOWOW が家にあつて、それで映画を録画して見るみたいなのが好きで、映像がそもそも好きだったっていうのと、あと震災復興の番組みたいなのをいろいろ当時やってたんです。それを見てすごい励まされることも多かったです。やっぱり映像の力ってすごいなって身に染みるのがたくさんあつて。

自分が小高に帰ってきて働きたいってすごく思ってたわけでも全然なかったんですけど、でも、やっぱり急に「出てけ」って言われると「何でなんだろう」というか。素朴な疑問として、「何で自分の家に帰っちゃ駄目なんだろう」と、理解はしているけど、心的には理解ができないみたいなところに対して、「じゃあ自分ができるところ何だろうな」って思つて。「映画のロケとかが来ると地域にお金落ちるよね」とか、「面白い話書けば観光客も来たりとかするよね」みたいなので、「自分が地域の魅力を知ってるから、ここで何かお話を撮ったりとかすれば人が来るんじゃないか」とか、そういう貢献の仕方があるかと思つて。高校で担任の先生との二者面談で、「映画監督になりたいんですけど、どうしたらいいですか」って聞いて、「こういう大学があるよ、ちょっと難しいかもしれないけど」みたいなことを言われ、自分が行った大学を知るっていう感じでした。

—なるほど、そうだったんですね。他にも何か復興関連の活動に参加なさってましたか。

根本：そうですね。映画監督になりたいって思つて、高校にも放送部があつて、映像を作ってたのを知ってたので、兼部で「じゃあ放送部入るか」と思つて入つて。まあ別に大して何も活動してなかったんですけど、取りあえず入ってみました。

あと OECD 東北スクールっていう、「被災3県の子どもたちを、リーダーシップ育成して地域貢献できるようにする」みたいなプログラムがあつて。当時は放送部の顧問の先生からは「(OECD 東北スクールに参加すると、活動の一環で)パリ行けるよ」みたいな話聞いて、「パリ行きたい」と思つて。「2年頑張ればただでパリ行けるんでしょ」と思つて、正直何もプログラムの詳細は理解せずに、最初気仙沼(宮城県)の第3回のスクールから参加をして。そこから1年半ぐらい活動して、大学1年生の時にいろいろな各被災地域の PR ブースを作って、パリのエッフェル塔の下でイベントやりますよみたいなプログラムで…いろいろ大変でした(笑)。

—OECD スクールは、経済協力機構の教育部門のところが主体になって被災3県の高校生を集めてパリで活動するプログラムでしたね。

根本：そうです。復興をPRしろっていうのがお題目で、何をするかは自分たちで考えろと。お金も自分たちで集めろと。

—高校や家の中でも直接されていなかった震災関連の話は、OECD 東北スクールでは向き合わざるを得なかった形ですね。

根本：そうですね。その時、福島からは相馬高校のチームのほか、伊達とかいわきのチームがあって、「それぞれの地域のPRをして」と言われた時に、「南相馬だったら野馬追かな。じゃあ、野馬追連れてくか」みたいな話をいろいろしながら。その時初めて岩手、宮城の、気仙沼や大槌の子とかとも交流があって、いろいろ大変だっていうのも聞いてたりとかしました。今大人になってから行くともっと大変だったなって思うけど、でも、そういう子たちと友達になることで何か少し、いろいろな地域で傷を負ってる子たちと一緒にいるのは居心地はよかったところもありますし、優秀な子たちが集まっていたので「こういうリーダーシップを持った同級生がいるんだ」とか「1個下の子がいるんだ」とかっていうのがすごい刺激になって、格好いいと思って純粹にそういう子たちと仲良くなりたかったりとかかっていうのもあったように思います。

—参加したことで、全く同じではなくても被災を経験している同世代の子たちと、何か分かり合えることはありましたか？

根本：そうですね。そういうことを経験して、痛みがある子なんだろうなっていうのが分かるだけでもちょっと親近感を持てるというか。明確に話したことも、そういう子が話してくれることもあった気がするんです。とか、自分たちの物語をちょっと作るみたいなコーナーがあった時にその同級生の子たちのを見てると、「やっぱりいろいろあったんだろうな」っていうのは（分かって）。一緒に仲間になっていくみたいなプロセスはありがたかったです。

—そこで李安奈さんご自身の話もしたりもしましたか？

根本：そうですね。してたと思います。避難してるとかっていう話とか、後半のほうになって自分もそこで刺激を受けて少しずつ話せる、ちょっと会議の中で話せるようになってたりとかした時に、「自分たちの伝えたいものって何だろう」みたいな議題の時に、自分は避難があっという、別に好きじゃなかったけど、でも、今はただの通学路みたいなこともやっぱりいいとおしいなって思ったりするし、みたいな話をしたりとかしてました。

—なるほど。

根本：あとは、そこに大人たちが有象無象にいた中で、それに対して評価をしてくれる。話したことっていうよりかは、こういうことが大事なんじゃないかって言った時に、「そういうことって大事だよね」って言うてる人がいたりとか、自分がこう思うんだってことに対して大人たちがきちんと評価してくれたりとかしたのが、そういういろいろな大人のロールモデルも見れたし、自分もそういう大人なり同級生の格好いい姿みたいなのに憧れて、どんどん違う方向に意識が向き始めたっていう感じです。

—違う方向という具体的なには？

根本：生活の中の家庭と学校とみたいな世界観で、自分が何かできるかなみたいなモヤモヤしたものから、「自分はこういうふうにやっていけばいいんだ、いろいろな大人はこうしてるし」みたいな世界観が、ちょっと見え始めたような感じですね。

—そこでさらに映画監督や映像制作をやりたいという気持ちは大きくなりましたか？

根本：そうですね。OECD のチームの中で、映像のチームとイベント企画のチームとお金を集めるチームとみたいな分かれていて、イベントのチームもやったし映像撮るチームもいたし、自分も入って手伝ったりしたし。あとはテレビマンユニオンっていう、NHK とか『情熱大陸』とか撮ってる映像のプロの方々、ディレクターとかプロデューサーの人たちもいたので、そういう人たちと話す中で「私も映像やりたいんです」とか言うと、いろいろ厳しい指摘をいい意味でもらって。いろいろ思いながら、「じゃあ、もっとこうしたらいいんじゃないかな」とかっていうのを考える機会をもらったりとかして。「映像面白いな」って思うきっかけとしてはすごく強まりました。

—高校の先生から勧められた大学を第1志望に？

根本：そうですね。第1志望にしてたんですけど、学力的に行けるかギリかな、みたいな感じで。一回諦めて他の映像系の学校とかも見てはいたんですけど、でも、やっぱり一番学ぶ上で適切だなと思ったのでAOで一生懸命受けて。小論文とかも全然書けなかったけど、美術の先生に持ってって「見てください」とか、一生懸命やって何とか入れてもらって。

—その第1志望にした大学は？

根本：日本大学芸術学部映画学科（以下：日大芸術学部）です。

3. 東京での生活

—東京に行かれたのは2014年からになりますね。

根本：そうです。2014年4月からです。

—なるほど。日大芸術学部での生活はどうでしたか？

根本：そうですね。友達も変わった人が多いのかなと思ったら割と素朴な子が多くて、深くまでいろいろな話をできるような優しい子たちが多かったです。みんないろいろ人間として面白いところをたくさん持ってる方々が多くて、唯一無二の友達がたくさんできました。

—何となく日大芸術学部というと、パンクなイメージがありますが。

根本：そう。私もそう思って「かましてかないといけないのかな」とか思ってたんですけど、やばい人が多いだろうなと思ったけど（笑）。見た目は普通のイモっぽい大学生がたくさんいたんですけど、でも、やっぱり中身は高校とかにはあんまりいないようなユニークな子たちが多かったです。

—そうでしたか。どういう授業内容ですか？

根本：基本的には必修みたいな、専攻の授業が映画の歴史、日本映画史とか外国映画史とか。あとシナリオの授業とか。あとは、映画っていうものは100年ぐらいいく歴史がない芸術作品なので、メディアの変遷の歴史とかそういういろいろな側面で座学がありました。あとは実習で1年生の時はシナリオも映像作品も映画評論みたいな、この映画はなぜ優れてるのか、こういうところが優れてるみたいなことを全部それぞれかなりの量を作られました。作品、映像をみんなの前で流して、上映後に自分が前に座って、教授からいろいろな攻撃を受けるっていう。なかなか精神的には、「君それ面白いと思ってるの？」みたいなことを言われて、「あー」ってなるみたいなのを全員分見ましたね。同世代がどういうものを作るかっていうもののフィードバックとかも含めてそこがやっぱり一番学びになったところでした。

—もうひたすら学ぶことと作ることの繰り返しで。

根本：そうですね。ずっとサイクル回していった。なので、課題が大量にあって夏休みに1本シナリオ書いて、映像作品も1本作って評論も2本ぐらいい書いてみたいなことをする中で、自分が何に適性があるかとか何に対して面白いと思うかとかっていうのを、大学時代を通して自分の特性を理解していきましたね。

—結構忙しい大学でしたか？

根本：そうですね。大学は割と課題もヘビーでした。

—やっていてどうでしたか。同級生の中には、この子すごいなとかいう子などは。

根本：います。自分だと編集が好きなんだな、みたいなことを理解したりとか。カットが格好いい人もいれば内容の構成が面白い人もいるし、あとは先生からディテールにこだわりなさいみたいな中で、ファンタジー的な表現が得意な人もいれば、私は割とリアリズムというかドキュメンタリー的な、カメラ自分で持って自分で編集してみたいな1人でワンマンで作るのが自分には合ってるなと思っていました。やっぱり映画って、本来は役者がいて録音、撮影、監督、助監みたいなチームで作るっていうのが多い作品なんですけど、自分のコースとかは個人作家みたいな、美術館で流れてる映像とかドキュメンタリーとかアニメーションとかなので、いろいろな表現を学んで自分はドキュメンタリーが割と特性に合ってたなと思っていました。

—作る作品もそういうドキュメンタリーなタッチのものでいらした。

根本：そうですね。

—自分が経験した震災のこと、原発事故のことをモチーフにしたことはありますか？

根本：そうですね。結構しました。例えば、町から人がいなくなるよみたいなことを突然、いつそんなことが起きるか分からないよみたいなことを、そんなに語るわけじゃないですけど映像表現としてやってみたりとか、日常が失われるみたいなことを表現してみたりとかしました。あとは、おじいちゃんのことを題材にしてドキュメンタリー、ちょうど2016年の夏が避難解除のタイミングで私が大

学3年生だったので、その解除された町に住んでいる様子みたいなのは撮ってみたりとかしてると、やっぱりいろいろなものが今見ると映り込んでるなというか。例えば、除染の作業をされてる方が庭まで来てたりとか。

—なるほど。

根本：大学3年、その時はいろいろ表現を通して向き合うのが難しい側面はやっぱりすごくありました、自分の気持ちと。でも、それを伝えるっていうことと、あとは家族にカメラを向けるっていうこと。やっぱり当時のメディアの怖さというか暴力性みたいなことも、被災地で避難所ですみたいなカメラを向ける暴力性みたいなものも強く感じていたので、大学の研究としてそういう家族にカメラを向けた作品の研究を試してみたりとかっていうのも、事前研究としてしたりとかしてました。

—相馬に住んでいた時とは震災に対してまた違ったかたちのかかわり方を。

根本：そうですね。何かしらやっぱり関わりたいって気持ちはあったんだろうなとは思いますが、それを使って何か、例えば、ネットに上げてとか映画祭に応募してたくさんの人に見てもらおうっていうのにはなかなか思考が、思考というかそれも怖くてあんまりできなくて、本当に作るっていうことで自分は完結していました。それも踏まえて、映画監督って作って見せるまでがセットで、それが作品で興行になっていくっていうものなので「合っていないな」っていうふうに思っただから、「監督じゃないな」みたいなことに大学中盤、後半とかはちょっと気付いていくみたいなことでした。

—作るけれども、作品を多くの人に見てもらうのは怖さがありますか？

根本：怖さと、あと、そこにあんまり興味がなかったっていう。多分、「作ったから見て」っていうのが全然、あんまりなくて。授業の中で同級生とかに見てもらうのは、同じものを作ってる仲間なので見てもらいたいとかはあるんですけど、それを多くの人に知らせたいみたいな気持ちがありません。多分、自分としての、言ったらホームムービーじゃないですけど何か記録としてとか、あとは消化するための作業として、自分自身がいろいろな葛藤に対してモノ作りを通して消化していくっていうことが必要だったんだろうなと思います。

—誰かに伝えるというよりは、まず自分の中で震災と向き合ったり消化したりすることが映像を作ることだった、という感じだったんですかね。

根本：そうですね。

—自分が被写体、インタビューを受ける側だった時と、カメラを持つ側になった時とで、どのような変化があったかお聞きできますか。

根本：被写体としてっていうのは、やっぱり嫌だなと思うところはあったので、自分が撮る側に移った時に変化したかっていうと…

もともと無邪気にカメラ向けてたかっていうと、そこは正直分らない。ちっちゃい頃から、写真に写るのが嫌いだったからカメラ触るようになったみたいなのところもあるので。そもそも出たがりじ

やないみたいなこととか、写真ちょっと嫌だなみたいなところがあったので、向けることの怖さみたいなのも、別に震災関係なく持ってたような気はします。

—そうなんですね。震災関連の映像を作った際、周りの学生たちはどういう反応をしていましたか？

根本：そうですね。自分がそういうバックグラウンドを持って大学に来ているってことは、割と仲いい大学のグループの中では最初に言っただけで、自分が作ったものが大学1年生の時に初めて表現したものがちょっと強かったんでしょうね、メッセージが。それを見て泣いちゃった子もいたりとかしたこともあって、それもすごい考えさせられたというか。

自分はその子を泣かせたかったわけではないけど、多分、当時まだ自分が抱えてたものが強すぎたんだろうな、みたいなことを思って、「じゃあ、伝えないほうがいいのか」とかすごく難しい気持ちになったりとかして、その子にも「どうして泣いてしまったの？」みたいなことをコミュニケーション取って。あとはそういうドキュメンタリー撮ったりとかする中で「どうだった？」みたいなことを聞いたとき、こういうものは面白く撮れてるよねとか、震災に対してもなるほどなってことを言ってくれたり。強く関心を持ったかどうかは分からないですけど、作品に対して純粹に作品として批評してもらって、友達同士とかで批評してもらってことはありました。

—そうでしたか。

根本：あとは、自分と同じぐらいの子たちが、例えば東北で被災した子で芸術系の大学に行くみたいな子がやっぱり何人もいて、多分、震災がなかったらその進路に行かなかったんじゃないかな、みたいな子たちで。割と演劇に行く子が多くて、多分、自分と同じように抱えてるものに対して表現の中で演劇っていうものが、何か救いになったんじゃないかなって思うので。今も演劇をやっている子たちも何人もいますし、映像に行った同世代ぐらいのドキュメンタリー監督も何人も生まれてたり、そういう世代が一定層いたりします。

—なるほど、そうなんですね。大学を卒業して小高に戻ろうって気持ちはその時点ではなかったですか？

根本：一切なかった。

—就職するなら東京で。

根本：そうですね。

—大学在学中に、やりたい仕事がだんだん変わっていった感じですか？

根本：そうですね。最初は映画監督にと思って（大学に）入って、映像作るの楽しいなと思ったけれども、仕事としてやるにはちょっとブラック過ぎると思ったので、制作部みたいな助監督とかその場を作っていく人たちの仕事はたくさんあったんですけど、それはちょっと大変そうだなと思って。じゃあ、CMのディレクターになろうと思いました。CM監督であればもう少しお金もきちんとしてるし、いけるんじゃないかと思ったんですが、面接とか進んでく中で絵コンテを描くテストが大体あって、それでいろいろ落ちまくりました。大学の中でそういうクライアントワークとしての作業みた

いなこととか、あとは、絵コンテをきちんとクライアントに分かるように描くみたいなことは学ばなかったもので、むしろそういうことをやらない学校だったので。それで、CMの監督って多分もう少しビジネスライクにやらないといけなんだなとかっていうのを感じて、多分お呼びじゃないなと思いました。

—なるほど。

根本：そしたら集団合同説明会みたいなところで、イベント会社、PR会社みたいなところと出会って。PR会社ってというのは商品発表会やイベントをして、タレントとかを使ってそれを発信するとか体験イベントをやってもらおうとか。ものを何か伝えるという中でPR会社ってというのは、彼らはプロだなと思って、そういうものに興味が出て（入社試験を）受けたり、あとイベントの会社を受けてみたりとかっていうので何件か行ったり、進んだり進まなかったりして。結局はイベントの会社、広告の総合会社の子会社で、中で映像もイベントもデジタルとかもあって、いろいろな領域をまとめてできるからっていうのがあって、その会社に行きました。

—なるほど。広告の代理店系列のイベントの事業部門ですね。

根本：そうです。

—そこに進まれて、就職なさったのが…。

根本：2018年の4月です。

—イベント会社も大変なことが多かったですか？

根本：そうですね。知らなかっただけでした。同じような、大体様子は変わらなかったです。なので、同級生は映像の制作の会社に行った子も多かったんですけど、大体同じような勤務形態でした。

—なるほど。すごい忙しい業界のイメージですが。

根本：そうですね。

—具体的な仕事内容は？

根本：大きい企業が新しい商品作ったりとか、こういうサービスありますみたいな展示会みたいなこと、BtoB（ビジネス対ビジネス）のものと、あとはBtoC。例えばタイヤの会社がオリンピックに協賛してて、オリンピックの名前借りてイベントやったり、アスリート呼んで一般の市民の人と一緒に交流したりとか。あとは、手紙を書くことを促進するイベントを開いたり、赤塚不二夫の盆踊りをやろうみたいなので恵比寿ガーデンプレイスでお祭りをやったり、保険のキャンペーンの企画をしたり、ウェブサイトの修正とかそんなこともしてました。

—なるほど。いろいろな仕事が同時進行であって、そして2018年っていうとオリンピックを控えて、それに向けて盛り上げようという忙しい時期で。

根本：そうです。

—仕事を選ぶ段階で、将来的に福島のことや地元のことを何かやりたいなとか、そういう思いなどはあったりしましたか？

根本：そうですね。映像やりたいって思ったのが地元きっかけだったんですけど、大学時代いろいろなところに旅行する中で、やっぱり日本全体いろいろ地域ってものは面白くなって思ったので、福島に帰りたいていうよりかはどこか地方で働ける、それもクリエイティブを通して働ける仕事ってすごい面白いなと思って、それはしたいなと思ってました。

なので、会社入ってから「どういう仕事、どういう案件やりたいの？」みたいな聞かれた時に「観光庁の仕事」って言って、「国の行政の仕事、行政のイベント委託みたいなのをやりたいです」って言って、「変わってるね」みたいなことを（言われて）。みんな割と面倒くさくてやりたがらないんですけど、そういうのもやりたいですって結構手挙げて行ったりとかはしてました。

—地域で何かやっていくことに魅力を感じていましたか？

根本：そうですね。地域プロデューサーみたいな、いろいろな地域でクリエイティブな人たちを見て、自分もそういう地域をプロデュースするようなことができるようになりたいとは思ってました。

—お忙しかったと思いますが、そんな中、2020年からはコロナ禍に入りますね。

根本：そうですね。

—緊急事態宣言が出たり、リモートワークになったりとか。でも会社が手掛けるイベントって、基本は対面ですよ？

根本：そうなんです。なので、全てのイベントが止まり、案件が全部なくなって。一部オンラインに切り替わるまでに半年とか3カ月とかかかりましたね。

—なるほど。

根本：対面で受ける厳しいフィードバックとオンラインで受ける厳しいフィードバックとの違いとか、やっぱりあの状況下っていうのでなかなか自分は難しいなっていうふうに思って。対面で先輩たちとやり合うのは楽しいですけどオンラインは息を潜めるしかなくて、ちょっとそれは自分は結構苦しいと思ってました。コロナも数年続くっていう話だったので、ちょうど社会人3年目だったし、「もう少し東京で修行したかったけれども、ちょっともう地方行くか」と思っているところについて調べました。でも、地方で働くってなると東京でやってる仕事よりちっちゃくなっちゃうっていうイメージがあって。ワーカーズベースの和田さんが、NCL（Next Commons Lab、地域おこし協力隊）の説明会をしているのに出会って、説明会聞いてみて「うちに来ないか」って言ってもらったという感じでした。

—なるほど。南相馬は候補の1つであったけど、絶対地元という気持ちがあったわけではなかった。

根本：そうですね。

—それまでに和田さんとの面識はありましたか。

根本：多分、高校生か大学生の時に連れられて一回（小高の）駅前に（小高ワーカーズベースが）あった頃に。解除前だと思うんですけど、その時に「人いないのにコワーキングやってる変わった人がいるな」と思って。当時は色々な人たちがいたんで、「こういう変わった人もいるんだな」と思って挨拶したのは覚えています。

オンラインで会った時は父のことも話してたんで、「根本さんのとこの」みたいなことになって、「よろしくお願いします」って。

—なるほど。それで小高に戻ろうとなったんですね。それはいつ頃ですか。

根本：2021年の2月に戻ってきました。（戻ろうと）決めたのが2020年の10月とか11月とかには。当時、結婚ほぼするかな、しないかなみたいな状態だったので、パートナーにも「戻ろうと思うんだ」という話をして、そうしたら相手も「俺も仕事辞めようかな」と言ってついてきてくれました。

—2016年の避難指示解除の後、2021年までも小高の実家には何度かは戻っていましたか？

根本：そうですね。解除前も、何回か荷物の整理とか取りに来たりとかっていうので来たりしてました。でも、年に数回でした。

4. Uターン後、小高での挑戦

—久々の小高での生活はどうでしたか。

根本：実家はいろいろ大変なことはあります。ジェネレーションギャップというか東京の暮らしに慣れちゃうと、いろいろな世代の人と一緒に暮らすってことは大変だなとは思いました。けど、こっちは同世代の子たちとか、移住組が結構いたので、そこで遊び相手になってもらって。なので、そこではすごく楽しく、やっぱり面白い子たちが多かったので楽しく過ごすことができました。

—なるほど。戻ってきてからのお仕事についていくつかご紹介いただけますか。

根本：戻ってきて最初の2年間かな？ 4月までだから、ちょうど2年ぐらい小高ワーカーズベース（現・OWB(株)）に雇用してもらって、若手の起業家育成みたいなプログラムが立ち上がっていたのでその事務局、いろいろな企画と参加者対応と、一緒に共同でやってる人たちの調整みたいなことをする業務をしてました。あとはガラスのアクセサリーの広報としてSNSやったりとか、プレスリリースって言って記者に見せるような文章を書いたりとかいうのをしていました。

—なるほど。

根本：それが、2023年の4月で産休に入り6月に産まれて。2022年の時に会社を産休で休むことが分かってた時に、産後パートタイムみたいなことで働くよりは自分で事業をつかって、子育てと仕事を自由選べたほうが良いなと思ったんです。2年間やる中でいろいろな周りに起業家の人たちが

いて、自分でもこういうことができるかなみたいなことが少しずつ描けるようになっていったので、妊娠中に補助金の書類を書いて応募して。6月、産んだ2、3日後ぐらいにその面接したりとかして。病院にパソコン持ち込んで面接して、そんな状態でその補助金をもらって、個人事業として3年間事業を回せそうだなというふうに思いました。その個人事業っていうのが、地域で住んでる若者が楽しくなるようなイベント作りの事業を考えて、2023年の8月から一応、緩やかにスタートしたっていう感じです。

—大変でしたね。イベントは具体的にどのような？

根本：本チャンのイベントを開始したのが2023年10月、同じ10月に演劇のイベントをやったりとか。あとは、女性が結構少なかったんで、12月に女性が集まれる会を開いたらいいよねっていうので、川内でご飯を食べながら女性が集まれる会みたいなのも企画してみたりとか。2024年に入ってから、シェフを地域に呼んでお店をやってもらいたいなことを考えてみたりとかしました。

—haccoba（小高の醸造所、一角でカフェも営む）ですね。

根本：そうです。あとは、飯館村のほうで何回か映画上映みたいなこともやってみたんですけど、やっぱり資金的に映画を借りるっていうのも結構お金がかかるので、それがペイしない（採算が取れない）中で楽しいことを作りたいなと思ってます。あとは、小高に戻ってきた時にフィルムコミッションの話をするので、地域を見ていろいろな映像撮られていく人もいるけれども、フィルムコミッションは地域にないなと思って。

フィルムコミッションというのは、地域のロケーションを、他の地域の映画などの撮影隊に紹介したり、コーディネートをしていくことで、地域に経済的還元すること。そしてその撮影に、住宅なり、そこの人たちが映り込んでいくことで、地域の誇りを取り戻すみたいなのを目標としてやっています。それをつくらうって、同じことを思ってたんだみたいな人と数人出会うことがあって、役所に行って企画書見せたりとかして、「うーん」ってなり、「いいことだけど、うーん」みたいな。

—難しい部分ですね。

根本：要は、予算を取らないと動けないとか、行政のバックアップがないと、ここで撮っていいですよって正式に言えないみたいな立て付けがあったりとかするので。じゃあ、ボランティア的にやるかみたいなので、まずはボランティア的にウェブサイト作ってみたりとかずっとミーティングを開いていって、それを経産省さんでこの地域で芸術を盛り上げようっていうチームがいて、彼らに「ちゃんと法人化しませんか」みたいなことを言ってもらって、経産省のバックアップでようやく今年の2月に法人化できた。きちんとフィルムコミッションとしてロケの受け入れを今できているような状態が、資金的にはまだまだいろいろな課題はありますが、いったん体制としてはできておりますというふうな状態です。

—実際にフィルムコミッションでロケを受け入れはもう始まっているんですか？

根本：そうですね。最近だと8月頭にHuluの作品で、こっちの地域の話撮りたいっていう話があって撮影対応したりとか、シナリオからちょっと相談乗ったりとかいうふうなことをしてます。

—飯館で映画を上映した後、お客さんの様子はいかがでしたか

根本：見終わってからすぐ帰るっていうよりは、なんだかんだ暖房に温まりながら少ししゃべるみたいな感じのことがあったりとかして。すぐ帰っちゃう人もいるんですけど、そこで日頃あまりしゃべらないような世代の人が、作品を通してどう思ったのかみたいなことを話している姿は、個人的にはやっぱりすごく面白くて。

真正面からその人と会話を楽しむことができるかっていうと、ジェネレーションギャップとかもあって、やっぱり難しいことはあるなと思いつつ、でも、作品を通して話すこと、その映画の事象についてどう捉えたのかとか、何に心揺れたのかみたいなことは、やっぱり世代を超えて会話をする楽しさだなんて、個人的には感じています。それが、お互いにできてよかったとまでは、まだできてないかもしれないですけど、日頃来ない人が訪れたりするきっかけになったり、会ったことない人が会うきっかけになったりっていうのは、ちょっとずつ生まれているかなという感じです。

—事業をやっている中で、課題は何かありますか。

根本：一番は、やっぱり資金的なところですね。どれも自走していける状態を目指しながら、補助金を獲得したりとか。フィルムコミッションでいくと、国の支援の下行っていますが、今後は行政の、市町村の支援で自走していくというところに持っていくという仕組みづくり。結構苦労はしています。

個人事業のほうも、そういった単発のイベントなり中期的なイベントをやっている中で、人件費をマネタイズできるほど、まだまだ収益は立っていないので、定期的に収入を得られる範囲を広げてやっていく事業として、映画の、小規模地域で、過疎の地域で映画を上映したいっていうところに、みんな作品を借りて上映していくみたいな事業を、中間的な団体というか事業として、今「シネポケット」もつくっていて、それを、いろんな地域と回していくことで、人1人雇えるかなというふうなところの収益を立てられると、他のイベント事業も、そういったところからスタッフを捻出してやっていけるのかなというところで、今、自走に向けていろいろ策を練っているというところですね。

—「シネポケット」について、もう少しお伺いしたいです。

根本：今まで飯館村で4回上映をやってきた中で、地域に映画館がないので、映画が見れる場所があったらいいなと思ってやってきました。でも、やっぱり作品を借りるとか、作品を選ぶ、何を流すみたいなこととか、そこの上映の取り決めみたいなことって、やっぱりすごく複雑な作業。この作品はこの料金でこうですって、明快なものではないんですよ。その不明瞭さがやっぱりすごく難しいものだなと思っていて。ただ、映画を通して人が集まるとか、そこでコミュニティができるみたいなことって、コンテンツとして力がある。地域で生活してる中で、何かコンテンツをやることの大変さとか、定期的にその場を生きる場としていくことの大変さみたいなことを感じる中で、映画ってやっぱり効果的だなというふうに思いました。

あとは、上映する中で、結構リスクがあると。作品を借りる場合、2パターンの料金設定があるんですけど、映画館以外の場所、非劇場型と呼ばれる場所では、定額、お客さんが入ろうが入らなかりょうが、この席数用意したら、例えば7万円ですとか、10万円ですっていうふうな金額なんです。(1人当たり)2,000円で10万円集めるって、結構な人数入れないと回収できない中で、10万円の作品

は借りれないよねってなってくると、やっぱりもったいないなと思っていて。

そういったリスクがある中で、普通の映画館だと、チケット収入に対して、5割を配給会社に戻して、5割が映画館の利益になる仕組みなので、そっちの料金体系で、座席数に対して料金を払うっていうのを、複数の地域をまとめてやることでできないかと今考えて、配給会社に交渉するよう準備をしている状態です。口頭で相談した限りでは、可能性あるかなと。移動上映をしてる方にアドバイスももらっていると、可能性あるかなというところが少し見えてきました。

サービスとしては、月3本、こちらでセレクトしてあげて、地域側が、この月はこれを流したいと選んで、毎月上映してもらって、2カ月に1回上映してもらってというふうな。

複数地域集めていくと、みんなで面白い作品を借りれるよねとか。手続きも気軽に、ほんとにネットで本買うぐらいの感覚で借りれたりとか。人数をたくさん集めないといけないっていう金銭的なリスクも解消できます。そんなふうに今考えて、できれば1月ぐらいにリリースできればいいなと思って、準備しているところです。

—起業家の方とお話する機会もあるんですか。

根本：そうですね。こっち来て2年間ぐらいは企業支援をやっていたので、起業と言っても正直、最初は私も何も知らなかったんですが、起業家とサポートする人の間に入っているいろいろな調整をする事務局の役割だったので、面談とかをずっと聞いてるうちに、「こういう考え方するんだな」みたいなことを、隣で聞いて議事録書いたりしてる中で理解をしていったっていう感じです。

—なるほど。小高へのUターンを決めた時に、何か不安はありましたか。

根本：何かあったかな。Uターンを決めた時は、その時までパートナーだった人が仕事、無職で行くみたいなので、無職で実家行くけど彼氏で行くのはちょっと気まずいから、じゃあ結婚するかみたいな感じだったりとか。

—そうだったんですね。

根本：だから、自分の仕事は、食いぶちは何となく雇ってくれるところあったけれども、パートナーの仕事っていうのはない状態で戻ってきたから、なかなか、この地域だと「何やってる人ですか」みたいなことになりがちなところで、ヒモですみたいなことで回ってるのとかを大丈夫かなみたいな、メンタル強いし、そんな気にしない人だけど大丈夫かなと思いながら、そういう一緒に来てくれる人に対しての不安とか、あとは、戻る前でいくと実家で暮らすのできるかなみたいなこととか。

—なるほど。

根本：仕事の不安はそんなになかったし、そもそも自分で何とか稼げばいいかなと思ってたぐらいだったから、そんなに。あとは、何か困っても東京戻ればいって思ってたっていう。別にここに永住するっていうつもりじゃなくて、取りあえず行ってみるかみたいな感じだったんでそういう話はよくしてました。

—ここに私たちの先輩が作った李安奈さんについての記事が載っている「花束」っていう冊子がある

んですけど、この発行から2年ぐらいたって、この取材を受けた時からの変化というか、自分が成長したなって思うことは何かありますか。

根本：成長したこと。何て書いたか忘れた…恥ずかしい。でも、忍耐力、仕事を通していろいろな役割をしたりとか、自分でこうやりたいんだってことを言って人を巻き込んでいくというのはかなり大変なことなので。当時はまだ誰か自分以外のプロジェクトに関して、「この人はこれを求めている」って思って、その人の求めている形にできるだけ近づけるとか、「こういうプロジェクトはこうあったほうがいいな」って思ってやってたけれど、今は自分がプロジェクトのオーナーとなっているので、全部の責任を自分で持つから、それはやっぱり…胃を何度も痛め病院に行きましたね。

子育ても1年生はよく分からないから。どれくらい何が大変なのかも分からず、抱っこしながらパソコンに向かうみたいなことはやっていて。子育ては不条理な生き物と日々言語の通じないコミュニケーションでやっていくっていうものなので(笑)。自分がいくら眠かろうがお腹がすいていようとトイレに行きたかろうが、目の前で要求をしてくる生物に真摯(しんし)に向き合わないといけないっていう忍耐力が、子育てと事業のオーナーとして付いたっていうところです。

—子育てとの両立って難しいですね。

根本：でも、それこそ夫もフリーランスじゃないけど自由に動けるっていうところで、夫の理解もあってすごいやってくれるので、別に大変っちゃ大変だけれども今は保育園入れちゃってるので、日中は自由に動けるようになって仕事はだいぶしやすくなったけれども、昔と違って残業ができないみたいな。今日までここまでやりたい、やらないといけないみたいなのはやっぱり、じゃあ、帰ってきて保育園拾って子どもにご飯食べさせて風呂入れて寝かしつけて、自分もギリギリ寝そうなのをこらえて9時からもう一回作業再開みたいなところは、例えば、何となく8時ぐらいまで作業ができれば終わるのにみたいな、その後ご飯食べてゆっくりできるのにみたいなのはなくなっちゃったのは、結構大変だなと思います。

—そうですね。李安奈さんは女性が集まるご飯会の開催やコミュニティ運営をやられる中で、コミュニティの入りやすさで心掛けたことはありますか。

根本：そうですね。でも、自分はそれこそ中学校の友達が遠方に行っちゃってみたいの中で、大学生になったらみんなで東京で飲み会を何度も開いたりとか、あとは、この帰省のタイミングとかで飲み会開いてみんなで会える場を作ったりみたいなのをよくやっていたので、その中でどうやったら来てくれた人が話しやすいかなっていうのは、自然に考えてやってたところではあったんですけど。

—なるほど。

根本：なので、間に入って共通の話題を探してみたいな、一般的なことですけど。あとこっちに来て学んだのが、地域コーディネーターみたいな仕事をしてる人がたまにいたんですけど、その人に「地域コーディネーターって何ですか」って聞くと、「自分がいなくても地域とその人が、新しく関わる人が関われる状態をつくること」って言っていて。じゃあ、この人だったらこの人と合うかな、みたいなのを「紹介します」って紹介して、何か共通の話題、「この人もNewJeans好きで」みたいな話をして、「私も好きなの」みたいなのを作ると、あとよしなにやってくれるんで。そういう仲介する

ようなことはやってみました。

ービジネスや日常の中で高齢者との関わりはありますか。

根本：そうですね。高齢者との関わり、それこそ、例えば、地域で有名な高齢者って言うとなれかもしれないけど、双葉屋旅館の女将さんの（小林）友子さんだったり、魚屋さんの女将さんだったり、何人かあいさつができるような関係性の人はいたりとか、おじいちゃん、おばあちゃんのつながりの中で顔見知りの人がいったりとか。事業を通して、初めて関わったのはシェフ・イン・レジデンス。その事業の中では、1人目のシェフの人は和食だったので、年配の方もお客さんとして来てくれて、結構好んで2回、3回来てくれたりとかしたのは、すごい嬉しかったです。そこに目掛けてやってたわけではないけれども、その人たちも喜んでもらえる企画になったっていうのはうれしかったです。

ー今までの震災のご経験の中で、心痛いことや、この人にも言えないんだなという気持ち、抱えるものが強すぎてメッセージ性が強くなりがちになったりという当時のご自身の気持ちと、今のいろいろな経験を積まれての気持ちで変化あると思うんですけど、それを今は少しずつ言葉で表現できるように？

根本：話したくないけど多分話さないといけないんだろうなと思って頑張って話したりとかして、ぐらいの高校時代でした。大学時代は、少しそこから物理的に距離もできたので、普通の楽しい日常みたいなことも楽しめる時間がかかなり増えて、いい意味で健やかに過ごせることが増えました。ちょいちょい家族の話をしたりとかニュースを見てそういうことが出てたりとか見ると、やっぱり難しいなと思うことはあったりとかして。

さらに働きだしてからは距離ができて、でも、やっぱり3.11の時に毎年ニュースがいろいろな、その時に向けてやったりとか24時間テレビでやったりとかした時に、難しいなと思う気持ちになることはあって。でも、何となくいろいろ消化が少しできてた頃に（小高に）戻ってきて、戻ってきてからのほうがやっぱり向き合うことが増えました。

ーそうですか。今後、この地域でも震災の記憶がない世代が増えていく中で、そうした人たちは小高とどう向き合っていくと思いますか。

根本：今、小高は中学生とかも多分1学年10人とかで、小学校だともう少し増えてるのかな。そういう人数の子たちしかなくなる地域で、地域への愛着形成みたいなことをできる母数が少ない。震災前の風景みたいなことを私はかすかに覚えてはいるし、震災を通して得た思いとかエネルギーみたいなこともあるけれども、純粋な他の地域はその地域の郷土愛みたいなことだけで何とか地域を回しているから、母数は少ないけどそういうもので回ってくんじゃないかな。地域が回るかどうかは危ういところはあるけれども、何か今こういう地域で起きてる取り組みに面白がって参画してもらうことで、震災をどうにかしなきゃとか風化がっていう話は、伝承とかって問題に関しては難しいとは思いつつ、その世代にある種求めるのであれば、面白がって何か参画してくれることっていうのが一番求めることかなと思っています。

伝承っていうことに関しては、例えば、浦尻貝塚があってみたいなそういう歴史としての伝承は大事だなと思いつつ、震災などパーソナルな話を町がどこまで歴史として伝承すべきかとかは悩ましい

など。



—最後に、今後に向けてこれから取り組むことをぜひ教えていただきたいのと、学生に対して何か伝えたいメッセージがあったら、教えていただきたいです。

根本：そうですね。自分がイベントの事業でコアにしているのが、「都市に依存しない若者を生み出す」みたいなことをテーマに上げていて、その心はやっぱり東京で便利な生活に慣れている人たちが、こういう地域で生活することをなかなか許容できない人が多かったりとか、移住してほしいってわけではないですけど、そこにも関わって生活を暮らすことの楽しさみたいなことが多分、低く見積もられているんじゃないかと思うんです。一次産業が衰退したりとか、都市に一極集中していくことで起こり得る問題もたくさんあると思うので、「地方で住むのって楽しいじゃん」って思える若い世代をつくっていく、そういう価値観の変容みたいなことをしたいなっていうのが自分がいろいろ今取り組んでることの根幹で。

あと、簡単に言うと友達が必要というかいろいろなライフステージの変化で東京に戻っちゃう、結婚を機に東京のパートナーと戻るみたいなことを見ると、同世代で遊べる人たちをいかに確保するかというか、その人たちにとって過ごしやすい場所にしないとなくなっちゃうみたいな。また通ってきてもらえる場所にしないと遊び相手がなくなるみたいなところなんで、そういう意味では、大学生とかも含めてこういう一緒にプロジェクトを今やってたりとかして、そういうよく関わってくれる人がいることで地域ってものが成り立つんだなっていうふうには思ってるから、学生に向けてみたいなどころでいくと「楽しいですよ」「自分は楽しく暮らしてます」という話が一番で。

要因として、面白い人たちが周りにいるからっていうところが一番大きくて、東京とそう変わらない刺激で生活できてる、リスペクトできる先輩たちが地域にいるっていうのが、自分がここでキャリ

アを積んでいく理由の1つなので、そこに大学の中でのコミュニティー以外のところで接点をぜひ、いろいろな大人たちと取ってもらって面白い大人がいるんだなっていう、絶望した大人ばかりじゃないんだなっていうところを何か、まずは参画してもらえることが一番いいのかなと、多分面白い人生になると思います。

—長い時間、本当にありがとうございました。

【学生の感想】

私は、李安奈さんが震災当時中学3年生であり、被災地のために自分が何をできるのかを考えても当時はなかなかアクションに移すのが難しく、いわゆる「無力感」を感じたり、学校生活でも震災の影響を受ける場面が多くあったことから、若い世代ならではの「苦しさ」があると感じました。それでも、「地元のために」「地域のために」というように常に使命感を持ち続ける李安奈さんの姿がかっこいいなと感じました。このような学びを踏まえて私は、まずは「自分のやりたいこと」を明確にして、李安奈さんのように、考え・行動できる人になりたいと思いました。

行政政策学類1年 阿部寛希

お話を伺って、李安奈さんは「とりあえずやってみよう」という芯が強いように感じました。たとえばインタビューでは映画監督になりたいという自分の興味から放送部へ入ってみたり、パリに行ってみたいという関心から OECD スクールに参加してみたりと、興味のある部分への一歩が軽やかに思えました。私は問題や取り組みに関して、ゴールまでの困難を過剰に想像して躊躇する部分が強いため、李安奈さんへのインタビューは認識を改める機会になり、また課題について等身大に受け止める重要性を学びました。

行政政策学類1年 佐久間天音

今回のインタビュー活動を通して、アーカイブ活動の大切さについて理解する事が出来ました。私は南相馬市の出身で実際に被災し避難も経験しました。しかし当時5歳だった私と当時中学3年生だった李安奈さんとは、同じ震災・原発事故を経験しても、その受け止め方は本当に大きく違いました。個人の経験や思いの一つ一つを丁寧に拾い上げて残していくことが、本当の意味で震災を後世に伝えていくということだと感じました。震災に関する客観的な情報は簡単に残すことができますが、そこに付随する人の思いも残すことで、震災・原発事故を多面的かつ立体的に伝承していくことができるのだと思います。

人間発達文化学類1年 松崎里帆子

今回のインタビューを通して学んだことは、「被災の形は多様にある」ということです。当時学生であった李安奈さんだからこそ感じた想いや経験を伺ったことで、震災・原発事故による被災の形や経験は年代が違えば異なるものであり、一つではないということを強く実感しました。また、このようなアーカイブ活動を通して、次の世代へ記憶を繋げることで、今後の福島における地方・復興創生を行う上で重要な役割を持つと思いました。

行政政策学類1年 金澤怜美